

エジプトの児童文学と公共図書館 —エジプトの読書運動—

平成 19 年 10 月 27 日

講師：エマード・エル=シャフエイ

通訳：アルモーメン・アブドラー

アブデルナーセル駐日エジプト・アラブ共和国大使挨拶

今回貴重な機会に、講師としてエマードさんが招聘されたことに感謝申し上げます。この開催にご尽力くださった国際子ども図書館、また関係者の方々に感謝申し上げます。また、本日のテーマに、エジプトの「すべての人に読書を」の運動を取り上げられたことを大変評価いたします。開催にあたって文化部カラム参事官からも感謝申し上げます。

今回のイベントの背景についてお話します。今年、国際子ども図書館職員である酒井貴美子さんがエジプトを訪問され、エジプトが国を挙げて進めている「すべての人に読書を」という運動が、実際に公共図書館をどのように応援しているかについて、視察されました。また、その運動を進めているムバラク大統領夫人がトップを務める総合福祉協会の主管する図書館を訪問されました。そうしたことが今日につながった、という経緯があります。公共図書館がいかに多くの人にサービスを提供し、いかにさまざまな便宜をはかっているかということ、また、それがエジプトの子どもの教育の発展、また、教養を高めることにつながっていることも、実際の目で見させていただいたと思います。

ちょっと前にエマードさんとお話する機会がありまして、私が書いた記事を思い出しました。私が書いた記事は「すべての人に読書を」の運動が始まって 10 年目の記念の日に書いたものです。運動がエジプトの子どもの教養を高めることや社会発展にいかに関与しているかを書いたことがありまして、それを思い出しました。子どもの教育の発展について、日本や他の国との話し合いを通して、ぜひ議論を重ねていきたいです。特に日本との関係、友好関係の中で、それが期待できると思います。

国際子ども図書館の齋藤館長を始め、この講演のためにご尽力くださった方に感謝いたしますと同時に、エマードさんの講演を楽しみにして挨拶を終わらせていただきます。

(以下、エマード氏講演)

はじめに

まず、今日の講演は、さまざまな方々の努力があってこそ開催できました。国際子ども図書館長齋藤友紀子さんならびに酒井さん、国際子ども図書館関係者の皆さんに厚くお礼申し上げます。またエジプト側からエジプトの文化省が今回の招待を受けてくれたことに大変感謝いたします。話を進めるにあたって一番尽力してくださったエジプト大使館、中心となってくださったワリード・マハムード・アブデルナーセル駐日エジプト・アラブ共和国大使に感謝いたします。大使は著名な作家であり学問の世界でも大変実績の多い方です。政治、美術など他の分野においても執筆活動をなさっているかたです。この悪天候の中、多くの皆さんに足を運んでいただいたことに感謝申し上げます。今日の講演のテーマはエジプト政府が進めてきた運動「すべての人に読書を」です。そのプロジェクトが発足して 17 年です。17 年に渡って成功を収めてきた「すべての人に読書を」をテーマにして、話をしていこうと思います。

今回の講演のために日本に出発する前の話なのですが、エジプト総合書籍機構(General Egyptian Book Organization : GEBO)に隣接した国立図書館に入りまして、偶然手に取った本がエジプト大使の本でした。その本の中に「すべての人に読書を」のコラムがありました。エジプト政府の試みが、子どもの教育、教養を高めるためにいかに貢献したかという内容の、良いコラムでした。この本が出版されたのは「すべての人に読書を」の運動が起こってから 10 年目のことでした。この本を読んだ時うれしく、大変役に立ったということをお話に入の前にお話しておきます。

もうひとつ印象に残っているのは今スクリーンに映っている絵本です。これは美智子皇后がお書きになった『はじめてのやまのぼり』(至光社 c 1991) のアラビア語版です。国際協力基金によってイラクの子どもの本を贈るというプロジェクトの中でできた本です。もちろんイラ

クだけでなくアラブの国々の子どもにも贈られています。この努力に私は感銘を覚えました。こういった試みをみると、アラブと日本の児童文学は深い部分でつながりがあるのではないか、という印象を覚えます。

スザンヌ・ムバラク大統領夫人の業績

「すべての人に読書を」の運動の発足人であり、尽力されているスザンヌ・ムバラク大統領夫人の授賞式の模様を紹介します。大統領夫人が来日された時、創価大学を訪れまして、そこで名誉博士号を授与されました。子どもの教育の発展に貢献したことが評価され、授与されたのです。

(スクリーンを指して) これはアレキサンドリア図書館です。「すべての人に読書を」の運動が評価され、ギリシャ・エジプト両国協会の会長から授与を受けました。時間の関係で簡単に説明しますが、授賞式には国際機関の代表者が出席され、大統領夫人を賞賛する言葉を述べました。授賞式にはエジプト文化省の大臣が出席することもあります。

古代エジプトの歴史

エジプトの歴史は、人類の文明の歴史において非常に深く根を下ろしていることは言うまでもありません。エジプトの歴史は 7000 年前に始まり、紀元前 4500 年前からパピルスに赤と黒のインクで書かれた本がたくさんありました。

(スクリーンを指して) これがパピルスで、古代エジプト時代からあったものです。今スクリーンに映っているパピルスは、古代エジプト時代は本の紙として使われていまして、その中にさまざまな知識が収められ、巻物として保存されていました。巻物の長さは、最長で 100 フィートになるものもあります。パピルスはエジプトのナイル川に生えた植物で、それを使って紙が製造されたのです。

古代エジプトの時代、本は多くの分野にわたって書かれていました。宗教、数学、文学、天文学、科学。特に科学については、いまだに完全に解明されていないということがよく知られ

ています。今でも謎めいているものとしてはミイラの保存方法が挙げられます。古代エジプトの科学の発展ぶりが窺えます。本の中に使われていたインクは赤と黒の 2 色が使われていました。中に記された言語は古代エジプトの言語です。この時代に使われていたアルファベットも言語として残って残っていて、その言語によって多くの学問がパピルスの本に納められました。

(スクリーンを指して) 今ご覧になっている写真は、実際に古代エジプトの坐像として残っています。この坐像は、当時の社会で一目置かれていた人物なのです。いかに古代エジプトでは学問とそれに携わる人間に対して敬意がはらわれていたかが窺えます。

写真に戻りますが、この坐像はエジプト総合書籍機構のロゴになっています。今でもエジプトは古代エジプトの考え方を大事にしているということです。本は神殿、または神殿に所属している学校、市庁舎、知識人の家にもありました。

本が生まれたことで、本を案内する職業が必要になってきます。図書館司書が初めて誕生したのは古代エジプト文明です。男性だけでなく女性もいました。

古代エジプトの歴史と知識に対する敬意の念について、概要をお話しました。「すべての人に読書を」や「家庭文庫」の運動は今始まったことではなく、そもそもエジプトの歴史にその土壌があったということをお伝えしたくて、皆さんに古代エジプトのお話をさせていただきました。

アレキサンダー大王がエジプトにやってきて、アレキサンドリアという都市をつくり、都市をつくるだけでなく、図書館の基礎をつくるわけです。都市の設計を考える時、図書館の存在も考えていました。その後プトレマイオス一世が彼の遺志を継いで図書館を完成させます。プトレマイオス一世はアレキサンドリア図書館を、古代エジプト思想を重んじたつくりにしました。

アレキサンドリア図書館についていえば、その歴史的役割は非常に大きいものであります。

収容できる本は 70 万冊、大学（ミシオン）もありまして、ほかに博物館、会議場が 10 箇所ありました。多くのパピルスの巻物が収蔵されていきました。長さ 100 フィートもの巻物もあります。会議場はサマーと呼ばれていました。このアレキサンドリア図書館は、大きく分ければ 4 つの施設がありますが、これだけの面積を使ったということで、いかに図書館の存在に意義を見出していたかがわかります。

そのアレキサンドリア図書館は 2002 年に新たにオープンしました。現在、収蔵冊数は 800 万冊までになっています。アレキサンドリア図書館の本来の役割は、人類の学問の発展に貢献することです。その意義に沿ったかたちで、図書館はさまざまな活動を展開しています。各国との学問を通しての対話や交流によってその役割を果たすことが、最も期待されています。

アレキサンドリア図書館は、長い歴史を通じて、多くの科学者が集まる場所でもありました。有名なのはアルキメデス、エラトステネスです。エラトステネスが考えた理論は世界の常識を覆しました。当時、地球は平らなものとされていたのですが、地球が丸いということを証明したのです。エラトステネスはある日、図書館の中で、持っていたペンと光線の影によって、地球が丸いという発想を得ました。アレキサンドリアの図書館から世界の常識を覆すような理論が生まれたのです。

新たにオープンしたアレキサンドリア図書館はさまざまな言語の本を所蔵し、また閲覧できます。この図書館が完成するにあたって、多くの国の貢献と参加がありました。なかでも日本は技術面とインフラ面に貢献して下さり、感謝しています。

運動の経緯

「すべての人に読書を」の運動のこれまでの経緯を説明いたします。ムバラク大統領夫人の考えによってこの運動が生まれたわけです。実際には 1982 年に「すべての人に読書を」ということを考え、修士論文をカイロアメリカン大学(American Univ. in Cairo)に提出しました。

論文のタイトルは「すべての人に読書の権利を」でした。その論文がきっかけで「すべての人に読書を」の運動が生まれたわけです。

論文を出して、それを実践に移す段階になります。大統領夫人はまず、小さなところから実行しようと思いました。カイロの庶民の学校に小さな図書館をつくりました。学校の名前はアッサラム、日本語では「平和」という意味になります。図書館は多くの子供から歓迎され、大きな支持を得ました。それを目の当たりにした大統領夫人は、次のように考えました。「国民がこれほど望んでいるのであれば、すべての国民にこのサービスを届けるべきだ。この読書の権利を、食べる権利と同レベルのものとするべきである」。こういう背景があつて「すべての人に読書を」の運動が生まれたわけです。

1988 年には国際出版連合会が会議を開催しました。ムバラク大統領夫人も参加し、子どもの図書館を議題として会議を行いました。大統領夫人は子どもの図書館の大きな役割について話しました。

「すべての人に読書を」の運動を広げるには多くのハードルがありました。大統領夫人のプロジェクトにはさまざまな問題が浮上ってきます。まずは読書をするのが、エジプトの社会に根付いていないということです。それは一般的な現象であります。もう一つは本が贅沢品であると考えられていること。三つ目は、本の値段が安いものではないということです。したがって、読むことができる子どもの数が少なくなるわけです。四つ目は、良質の図書館が数の面では非常に少ないことです。子どもの図書館では児童書の専門家が必要になるわけですが、その経験が不足していることが問題になりました。

その後、2年から3年の年月が流れます。1991年6月7日にカイロのアラブ・アルムハマディにある図書館から「すべての人に読書を」というフェスティバルが誕生します。このフェスティバルは4か月に渡って続きます。このフェスティバルによって、運動は総合的なプロジェクトとして位置づけられ、多くの地方と地区に拡大していきます。

最初、運動が始まったときのスローガンは「すべての子どもに読書を」でしたが、後に「すべての人に読書を」と変わりました。

1992年には「村の子どもの年」の運動が始まります。読書を僻地にまで広めようという運動が活発になります。地方のかかえる問題としては、図書館がない、本が届かないということがあったため、そこで考えられたのが移動図書館です。車を使って、本を僻地、村まで運んでいく移動式の図書館が生まれました。

1993年、新たなスローガンのもと新たな運動が始まりました。すべての場所、通り、公園、田園地帯など、「すべての場所に読書を」という運動が始まったのです。移動図書館を利用して、至るところに本が届くようになりました。エジプトの子どもにとって、本というものをパンと同じように、生活の糧と同じように位置づけるのです。運動を推進していくためには政府の大きな力が必要でした。運動は新たな展開を迎えます。1994年には「すべての人に読書を」は複合的なプロジェクトに変わって、「家庭の図書館」という、家庭の本棚を充実させる運動が生まれました。すべての国民、すべての家族に本が届くように、という運動がさらに拡大していったのです。

安い定価で本を提供

時代の変化とともに、新しい技術の導入も必要になってきます。コンピューターの導入により、パソコンなども図書館に設置されました。国の協力が必要になってくる中で、大統領夫人がトップを務める総合福祉協会が国との交渉を行ってきました。その結果、本が手ごろな値段で多くの子どもたちに行き渡るようになりました。文化省の管轄にあるエジプト総合書籍機構が中心になって出版と本の値段を抑えることに力を入れました。その結果、本の定価というものが定まりました。エジプト総合書籍機構が出している本の定価は何年経っても変わりません。民間の出版社とは大きな差がありますが、定価が変わらないということは大きな実績となっています。

1994年は、エジプト総合書籍機構が171冊の本を出版することでスタートします。その内訳は、116冊の本は国内の著者によるもので、残りの55冊は翻訳された本です。1988年にノーベル文学賞を受賞したナギーブ・マフフーズという作家の本もその中に含まれています。彼の作品は日本語に翻訳されているものもあります。こうして本の定価を定めたことで、国民すべての家庭に本が行き渡るようになりました。本の値段は本の大きさによって多少変わりますが、日本円にして30円から40円の値段で買えるようになりました。ハードカバーのものは150円で買えるようになりました。手ごろな値段ですべての国民が買えるようになったのは組織の努力によるものです。

当時はエジプトの国民は本の定価に対して大変驚きました。新聞を買う値段で本を数冊買えるようになったのです。その中には有名な本、ハードカバー、百科事典に相当するものもあります。それも驚くほど安い値段で買えるようになりました。当時は競い合って本を手に入れようとしたのを覚えています。「すべての人に読書を」のフェスティバルの時には、できるだけ多くの人が買えるようにと夜中の12時まで時間を延ばしました。それくらい国民は本を求めていたといえます。国民の支持を受けたことによって、販売にさらなる力を入れなければならない状態になりました。

1995年、運動は新たなスローガンを掲げます。「アラビア語を正確に話しましょう」という運動です。すなわち正則アラビア語というのが日本語訳ですが、標準語といえますか、本を通して正しく学ばせようという運動に力を入れました。また海水浴に行く人のために、海岸にBeach Libraryと呼ばれる移動図書館もできました。健常者だけでなく、自閉症の人を対象にした図書館もできました。

1996年、エジプト総合書籍機構が272冊まで出版書籍を増やし、発行部数は3000万部になりました。運動は多くの学校とさまざまな地域にまで広がりました。この運動から新しいアイデアが生まれます。たとえば、大きなカバン

に本を詰め込んで、本が届かない地域に届けよう、あるいは都会の中でも図書館がないところに本を届けよう、というアイデアが生まれました。タイトルをつけるとしたら、日本語では通俗的な言い方になりますが、「使い回し図書館」——ひとつの地域で1週間ぐらい貸し出して、回収したら他の地域に行き行って貸し出すという「使い回し図書館」が誕生したのです。一般の場所だけでなく刑務所や病院の図書館が設けられるなど、いろいろなかたちでその運動は拡大していきました。同時に読書を奨励する活動も行われました。美術コンテスト、知識を競うコンテストなど、読書の意欲をかきたてるような活動が活発に行われました。

エジプトの読書運動の広がり

こうして、成功が目に見えるかたちになっていきまして、ユネスコはエジプトの読書運動を大変評価しました。そして、その試みを他の多くの国々に拡大させようと、ユネスコは提案しました。ユネスコが提案した国々を紹介いたします。

ユネスコが読書運動の後押しをした国は、アルジェリア、チュニジア、イエメン、サウジアラビア、パレスチナです。その国の状況によりその進め方は変わりますが、アイデア自体を真似しようとする国もあります。モロッコ、ドイツ、中国。中国は5年計画で全地域に運動を広げていく政府案があります。インドでは、ムバラク大統領夫人の名をつけた図書館ができました。ロシアでは、モスクワ大学を通じた協力関係によって実行するための検証も行われています。ユネスコの会長はエジプトの運動を大変評価し、1998年から、「すべての人に読書を」のフェスティバルを国際的なフェスティバルに位置づけるに至ったのです。

本日いらしているアブデルナーセル駐日エジプト大使の著作にも、「すべての人に読書を」が紹介されています。コラムのなかで、エジプト人の読書への意欲についても触れています。その運動に携わった人たちについてもコラムに書かれています。

「すべての人に読書を」の運動はメディアによって後押しされました。大変支持されたわけですが、広告、案内は活発に行われました。「すべての人に読書を」のロゴ入りポスターが、街中で見られるようになったのです。手が届かなかった本に手が届くようになったのはこの運動の大きな実績です。たまたま、地元の図書館を訪れて、そこで会った人たちから、本を読む喜びが伝わってきました。図書館がアットホームな感じで、人々が図書館をよく利用していることがわかりました。

「すべての人に読書を」の運動のなかで、ベストライターに贈られるさまざまな賞も設けられました。そのコンテスト、大会を通して児童文学を発展させることが目的だったわけです。その中で一番権威のある賞はスザンヌ・ムバラク賞です。最初のころは優れた作家に与えられる賞だったのですが、後にはイラスト、絵本、出版社も対象になりました。子ども用のパソコンソフトの開発者にも賞が贈られるようになりました。さまざまなシンポジウムも活発に行われました。そしてその中で受賞式も行われました。それらの賞は社会的な意味でも金銭的な意味でも質の高いものであります。

最後に「すべての人に読書を」のプロジェクトを通じて、日本とエジプトのさらなる協力関係の強化が期待できるものと思っています。その強化にあたっては、いろいろな組織の貢献が期待されます。もちろん日本交流基金、JICA、またその枠をつくるユネスコの役割は大きなものです。

質疑応答

Q：すばらしいご講演をありがとうございました。こちらにある本を拝見するに、一昔前はアラブ圏の絵本というと、宗教的なもの、または知識を与えるもの、道徳的なものが目に付いて、純粋に楽しむための、子どもの心の栄養になるような創作絵本が少なかったように思うのです。しかし、今は拝見すると創作絵本が増えてきたと思うのですが、現在の位置づけ、エジプト総合書籍機構がどんな基準で本を選んでおられ

るのかお聞きします。

エマード：子どもの本自体は古いものもあれば、改良されたものもありますが、「すべての人に読書を」の活動が始まる前から、本の出版は活発だったのです。学校では1週間に1回、図書の授業があります。図書館に行って何かを読む。強制的ではないけれども、ほとんどの学校が図書の授業を設けています。本の内容ですが、絵本とそうでない本、内容の古いもの、例えばアラビアンナイトなどをモチーフにしたものが沢山ありますし、またそうでないものも沢山あります。対象者の年齢を考えた上で作るわけです。絵と文字の割合などを考慮することもあります。道徳的なものを教える本は間接的な表現が多いのですが、善悪をはっきり教えるようなものもあります。

今見ていただいているのは私の本です。『月のともだちらくだ』というタイトルの本です。本の内容もさまざまなものがありますので、この後、手にとって見ていただくとわかると思います。イラストそのものを非常に大事にしたものもありますし、それによって評価され、受賞されることもあります。内容だけでなく、本を作る技術的なものも評価の対象になっています。

2002年にボローニャ国際児童図書賞で受賞した本があります。エジプト人の作品で、タイトルは『もっともすばらしい民話』“Agmal Al-Hekayat Al-Shaabeya(Most Beautiful Folk Tales)”というものです。この作品の作者はヤクーブ・シャルニー(Yaacoub El-Sharouny)でイラストはヘルミー・トニー(Helmy El-Touni)です。どちらもエジプト人です。

2006年ボローニャ国際児童図書賞のニューホライズンの部で、エジプトの絵本が優秀賞を受賞しました。『銀のさかな』”Al Samaka Al Fadih(The silver fish)”です。

Q：駐日エジプト大使がお越しになっているので、お願いといったほうがいいのですが、アラビア語を1年ぐらい勉強しています。エジプト

にどういう作家がいるかというような情報がほとんどないのです。エジプト大使館のホームページをみても観光ガイドは沢山出ているのですが、文化的な内容がない。営業的に成り立たないものは出版社は作らないと思うのですが、インターネットからの発信はいくらでもできると思うので、文化的な発信をホームページでやってほしい。

アブデルナーセル大使：私が駐日大使に就任したのは6週間前です。就任してすぐに大使館の中の組織、文化部、観光局、あるいはメディア局の担当者と協議をしまして、その中で一番焦点となったのがエジプトのサイトです。非常に重要な課題として位置づけられています。長い間改良されなかったのは、いろいろな要因があります。技術的な面、運営の面などの理由によるものもあります。

エジプトの外務省は今、別のかたちで、エジプトの情報を発信するサイトの改良と改善に取り組んでいます。エジプトの在外機関のサイトを一つに融合させるというプロジェクトが進められているのです。近い将来、駐日大使館のサイトは外務省のサイトの中で見られるようになります。したがって、内容も改善していく努力をしたいと思います。毎日あるいは週1度は更新できるような状況にしたいと考えています。これに関しては助成金が必要ですし、また、運用の面ではさまざまな措置をとらなければなりません。

改良が遅れたというのは事実なのですが、それには理由があります。観光に焦点をあてるというのは、エジプトと日本の交流に大きな役割を果たすものとして言うまでもありませんが、観光だけに焦点をあてることが交流ではないのです。そのことを今後の政策にきちんと盛り込んでいきたいと思っています。

文化的な交流としては、今日エマードさんが講演してエジプトの読書運動を紹介していただいたこともその一つであります。昨日、日本記者クラブでエジプト作家連合会の会長さんが自ら講演を行いましたし、3日前には東京国際映

画祭にエジプトの作品が二つ出品されて、エジプト大使館の文化部でセミナーも行われました。ちょうど1週間前にエジプトの民族舞踊団の公演を行いました。10日前にテレビを通して見ていただいたと思いますが、サッカーの代表チームの日本との対戦試合もありました。文化の交流の場が決して少なくないことを強調したいです。サイトのこと、文化発信のことも含めて、今後さらなる措置をとっていきたいと考えています。

Q：日本では著作権の保護が切れた文学作品を読めるホームページがあるのですが、エジプトでもそういうものがあるならば、サイトへリンクを張ってほしいということと、ないのであれば作っていただきたい。アラビア語の本は、世界的にもなかなか目にできないと思うのです。

次は日本の国立国会図書館に対する要望です。著作権の切れた作品のホームページはボランティアによって経営されています。アラビア語の卒業生の皆がアラビア語を生かす職場にいるわけではないのです。そういう人たちに、著作権保護の切れた作品をボランティアで翻訳させて、ホームページで公開していくような音頭取りを国立国会図書館でしていただいて、埋もれた才能を生かしていけるような事業もしていただければありがたいです。

エマード：アイデアそのものは評価します。そのアイデアを実行に移すにはさまざまな問題をクリアしなければなりません。エジプトと日本が協力することはできると思いますが、著作権のない作品は、まだデジタル化されていないのがほとんどで、デジタル化の技術的な面も資金面でもハードルが高いです。

エジプトの最近の動きとしては、新しい本を電子本として出版するサイトの運営者が出てきています。ただ、本を閲覧する時に有料になっています。エジプトの本をデジタル化すると膨大な数になってしまいます。フランスのエジプトへの遠征が1789年にあったわけですが、その当時から本の発刊が始まっています。

その膨大な本の中では、名作もの、歴史のある本については、著作権のないものとして提供できるのです。が、そうではないものが沢山あるわけです。いずれにしても、実現するには、エジプトの側だけではなく、当然日本も、技術的な面と人材など、さまざまなことを固めたうえでやらなければいけないと思います。それを具体的に検討していきたいと思います。

国際子ども図書館職員：二つ目の質問にお答えします。ご存知のように「近代デジタルライブラリー」という、国立国会図書館所蔵の明治期以降の書籍を原文で読んでいただくよう計画的にデジタル化して世界へ発信する取り組みをしております。こういったものは予算の裏づけが当然必要であります。私どもも計画的に広くやっていきたいと思っているところですが、定員削減などの問題がありまして、進めていくにはやはり皆様方のお声、支持が図書館としても必要と思っております。そういった意味で、今日ご提案されたことを真摯に受け止めさせていただきますが、皆様方のご支援をいただいて、一緒に日本の文化を発信していければ、と思っております。皆様方が声をあげていただきますと、私どもも動いていけると考えている次第です。